



Title	終章 調査報告のまとめ
Author(s)	小内, 透
Citation	北海道アイヌ民族生活実態調査報告, 4, 115-117
Issue Date	2015-09-30
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/60115">http://hdl.handle.net/2115/60115</a>
Type	bulletin (article)
File Information	AINUrep04 (9).pdf

[Instructions for use](#)

# 終 章 調査報告のまとめ

小内 透

北海道大学大学院教育学研究院教授  
北海道大学アイヌ・先住民研究センター兼務教員

本報告書では、アイヌ民族多住地域における地域住民のアイヌ民族やアイヌ政策に対する評価とアイヌの人々との社会関係に関して、札幌市とむかわ町の地域住民の方々を対象にした郵送法による「日常的な交流とアイヌ文化・アイヌ政策に関する意識調査」の結果にもとづいて検討してきた。そこで、明らかになったことを改めて確認し、調査報告のまとめとする。

(1) まず第1章で、札幌市およびむかわ町における地域住民とアイヌの人々との交流状況、また交流を絆づけている条件を検討した。その結果、札幌市ではアイヌの人々との交流がある住民は4%弱とごくわずかしか存在しなかった。そのため、札幌市でアイヌの人々との交流を絆づけている条件を検討するのが困難であった。これに対し、むかわ町では同様な人々は、6割弱と過半数に達していた。その背後に、両地域における地域住民に占めるアイヌの人々の比率の違いがあることはいうまでもない<sup>1)</sup>。それは、「近所付き合い」と「職場付き合い」が交流内容の中心を占めていたことからもうかがえる。むかわ町では「近所」や「職場」という身近なところにアイヌの人々がいることが多いということである。

ただし、むかわ町では、交流の度合いに世代差があり、老年層から青年層へと世代が下るにつれて交流がある者の比率が減少していた。さらに、女性より男性、地元以外から来住した者より地元で生まれ育った者、ホワイトカラーよりブルーカラーの方が、アイヌの人々との交流が盛んであった。年齢、性別、出身地、職業といった地域住民の属性が交流の度合いを左右する要因となっていた。

また、青年層を除いて、定住志向を持つ者の方がそうでない者よりもアイヌの人々と交流する傾向が見られた。さらに、アイヌの歴史や文化についての知識を獲得し、アイヌの文化に触れる体験をし、アイヌの文化に触れることへの積極的な意志を持つ者において、より高い交流頻度とより多彩な交流が実現される傾向が強かった。

こうして、より盛んな交流が実現されるには、地域住民としてともに暮らす環境に身を置くことが基盤となるのは疑う余地がない。ただし、学校教育あるいはその他の機会を得てアイヌの歴史や文化を学び体験することが、より多くの交流につながっていることにも目を向ける必要がある。知識や体験、体験への関心を持つことが交流の入り口となり、交流によって知識と体験の蓄積が促され、体験への関心が深まる可能性があるからである。ここから、こうした循環を支えることができる広い意味での教育について考える必要があるとの問題提起が可能になる。

(2) 第2章では、札幌市とむかわ町における和人住民のアイヌ文化への関わり方を他の地域（新ひだか町、伊達市、白糠町）との比較の視点も導入して検討した。そこでは、和人住民におけるアイヌ文化の知識と体験の地域的な共通性が浮き彫りになった。たとえば、いずれの地域において

ても、おおよそ2割程度の者がアイヌ文化を体験している点、アイヌ文化の知識を得る経路としてアイヌ文化に関する施設や展示物が最も多く見られる点、アイヌ文化は日本の国として残すべきと考える者が最も多く見られる点が5つの地域で共通していた。さらに、アイヌ文化の体験の規定要因にも、地域的な共通性があった。男女間では選好するアイヌ文化に違いがあり、若い世代ほど学校を通じてアイヌ文化に触れ、高学歴の者ほどアイヌ文化の知識を得ていた。

これとは対照的に、和人住民におけるアイヌ文化の知識と体験のあり方に関して、地域的な多様性も存在した。札幌市では、将来体験したいアイヌ文化がある者がとりわけ多く、情報メディアを通じてアイヌ文化の知識を得る傾向も強かった。これに対し、むかわ町では、札幌市と同様、アイヌ文化の知識を持つ者が多いものの、「インフォーマル」で「パーソナル」な経路を通じてアイヌ文化の知識を得ることも多いという点で独自な特徴が見られた。

こうした和人住民におけるアイヌ文化の知識と体験の地域的な多様性の背景には、当該地域の学歴構成や人口構成の特質、さらに地域の歴史的な性格が存在しているといえる。

(3) 第3章では、札幌市およびむかわ町に居住する地域住民が各種のアイヌ政策に対してどのような意識を持っているのかを、地域住民調査の結果をもとに明らかにした。そこでは、全般的に「アイヌ文化の保存・振興」「アイヌ語の保存・振興」「正しい理解の提供」といったアイヌ文化政策に対する支持が高く、反対に「雇用対策の拡充」「教育支援の拡充」「経済的支援の拡充」といったアイヌの人々の生活支援に関する政策への支持が弱いという傾向が確認された。こうした傾向は北海道内の他地域における調査でも確認されたものである。また「特別な政策を行うべきではない」という項目に対して肯定的な回答をする人の割合が、むかわ町においては約7割、札幌市でも半数を超えていた。ここから、アイヌ民族のみを対象にした政策、アイヌ民族を「特別」扱いする政策に対する拒否感や否定的な態度が根強く存在していることが明らかになった。

一方、札幌市とむかわ町で、各種のアイヌ政策に対する明確な温度差も見られた。アイヌ政策に対して肯定的に回答する人の割合は札幌市において全般的に高く、逆にむかわ町では低いという傾向が見られた。とりわけ「雇用対策の拡充」「教育支援の拡充」「経済的支援の拡充」といったアイヌの人々の生活支援に関する政策については、札幌市とむかわ町の間における肯定的な回答の割合の差が大きかった。こうした差は、各地域におけるアイヌ民族の歴史、またアイヌの人々が身近に存在するという地域的な環境に起因するものであろう。アイヌの人々が非常に身近な存在であり、アイヌ政策についても見聞きした経験があるからこそ、それに対して抵抗感や拒否感を持つ人も多いと考えられる。実際、アイヌ政策に対する支持の規定要因に関しては、回答者の個人属性やアイヌの人々との交流といった要因はほとんど影響を与えておらず、地域的な要因によって規定される部分がきわめて大きかった。

今回の調査結果を見ても、アイヌ関連政策、とりわけアイヌの人々への生活支援策に対する支持は十分に広がっているとはいえない。アイヌ民族に関する知識、さらにはアイヌの人々の生活の実態に関する正しい知識を提供しながら、幅広い層に対して働きかけを続けていくことが、今後政策を進めていく上で重要なポイントになるであろう。

(4) 第4章では、札幌市、むかわ町を対象に、これらの地域に暮らす一般住民が、アイヌ民族多住地域としての札幌市、むかわ町をどのように評価しているか、また地域への評価が、アイヌ民族やアイヌ文化への受けとめ方にもたらす影響についても検討した。

検討を通じて、地域への評価については、札幌市とむかわ町では、近所付き合いの活発さに関して、都市と農漁村の一般的な特徴が明らかになった。つまり、大都市である札幌市では近所付き合いが活発でなく、それが新住民にとっては居心地のよさにつながっていた。一方、農漁村であるむかわ町では、近所付き合いが活発であると同時に、昔ながらの習慣も重視されていた。

これに対し、アイヌ民族との交流、アイヌ文化への関心、アイヌ民族への経済的支援・教育支援に対する評価と地域的な要因との関連に関しては、とくに居住年数が大きな意味を持っていった。その場合、居住年数の長さはアイヌ民族との交流を盛んにし、アイヌ文化に关心を強め、アイヌ民族への経済的支援・教育支援に対する評価を積極的なものとするという直線的な関係にはなっていなかった。実際には、居住年数が長いことは、交流と文化にはプラスに働くが、経済的支援・教育支援に対する評価にはマイナスに作用していた。つまり、アイヌ民族との交流やアイヌ民族に対する意識は、それぞれの要素によって異なった規定関係を持っていることがうかがえた。

とくに、むかわ町の場合、居住年数の長い人々は、日常的に、アイヌ民族と活発な交流を営んでいる。にもかかわらず、経済的支援には消極的であった。それは、日常的な付き合いがあるからこそ、逆に経済的な支援が必要であるように感じられないということであろう。

(5) 以上のように、アイヌの人々との交流、アイヌ文化への関心、経済的支援・教育支援に対する評価は、アイヌの人々と地域住民の日常的な関係性の蓄積のあり方によって規定されることが明らかであるといえる。それゆえ、アイヌの人々が数多く居住する地域では、アイヌの人々自身が自らの実情を地域住民に伝え、地域住民がそれに耳を傾けることによって、互いの新しい関係性を築き上げていくことが求められている。その際、当該の自治体が、アイヌの人々と地域住民の間に立って、両者の日常的な関係性をよりよい方向に促していく努力をする必要がある。

#### 注

- 1) 2008年時点におけるウタリ協会札幌支部と同協会むかわ支部の会員はそれぞれ275人、265人とはほぼ同じ規模である（山崎 2010：8）。一方、2010年国勢調査人口は札幌市が1,913,545人、むかわ町が9,746人と大きく異なっており、地域住民に占めるアイヌの人々の比率には大きな違いがある。

#### 参考文献

- 山崎幸治, 2010, 「調査対象の特性」 小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その1 現代アイヌの生活と意識——2008年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書』 北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 7-18.

(小内 透)